



営農NEWS



ネギのネギアザミウマやネギハモグリバエの防除を実施しましょう

県内のネギ栽培には多くの作型があり、主要産地では周年出荷のために、常にどこかでネギが栽培されている状況となっています。このため、連作障害や難防除病害虫の発生が徐々に拡大し、産地を維持する大きな課題となっています。

ネギの葉に寄生して表面を食害し、白化症状や奇形葉などで品質低下を招くネギアザミウマも、近年は多発生が続いて難防除化しています。これは、ユリ科作物が常に栽培されていてネギアザミウマの寄生、繁殖に有利なことや、以前は防除効果が認められていた一部の薬剤に抵抗性が発達してきたことなどが大きな要因と考えられます。また、アザミウマ類など微小害虫は増殖が早く、体が小さくて作物のすき間などに寄生しているため、一度多発生すると防除効果が上がりにくい傾向があります。なお、ネギアザミウマは越冬後の 4 月頃からネギ圃場に侵入、寄生し、気温上昇に伴い被害が拡大して 6~8 月頃に発生盛期となりますが、その後も 11 月頃までは寄生して、被害が続きます。

ネギハモグリバエの被害は、乳白色の幼虫（体長 2~4 mm）がネギの組織内に潜入して食害し、その痕が白いスジになります。成虫は体長 2~3 mm の小さなハエですが、年 5~6 回発生して産卵、羽化を繰り返します。ネギでの被害は、春と秋に多い傾向です。

これらの害虫は、高温少雨の気象条件で、多発生する傾向にあります。このため、各圃場における寄生や被害状況を確認し、発生初期~少発生のうちに必要なに応じて薬剤防除を徹底してください。

<防除のポイント>

1. 育苗や本圃栽培中に処理できる粒剤やかん注剤の積極的利用

殺虫粒剤やかん注剤は散布剤に比較し、一般的に持続効果が長い傾向があります。また、散布の労力も軽減され、粒剤では処理後に培土処理などを行うことで防除効果が期待できます。本圃栽培中に処理できる粒剤や灌注する水溶剤などを選び、系統の異なる剤を順次使用することで、省力で安定した防除が期待できます。

2. 増殖初期における集中散布と抵抗性害虫出現への対策

アザミウマ類など微小害虫は増殖速度が速いため、増殖初期に一週間間隔で 2~3 回集中して農薬散布を行う防除が効果的だといわれています。なお、特効的な殺虫剤を使用する場合は、抵抗性を助長させないためにも系統の異なる薬剤でローテーション散布を行い、散布後は必ずそれぞれの防除効果を確認してください。

3. 展着剤の加用と丁寧な散布作業

ネギは、薬液の付着しにくい作物です。防除効果を安定させるため、展着剤の加用が必要です。また、微小害虫は下葉や葉鞘のすき間など薬液のかかり難い所に生息するため、十分量の薬液で株全体に散布することが重要です。

表 1 ネギのネギアザミウマ（アザミウマ類）、ネギハモグリバエの主な防除薬剤（平成 29 年 5 月 25 日現在）

薬剤名	ネギアザミウマ	ネギハモグリバエ	使用量または希釈倍数	使用時期 / 使用回数
ベリマーク SC	○	○	400 倍 (0.5ℓ/セルトレイ等※灌注)	育苗期後半~定植当日 / 1 回
	アザミウマ類	ハモグリバエ類	2,000 倍 (0.5ℓ/㎡株元灌注)	(生育期) 収穫 7 日前まで / 1 回
スタークル顆粒水溶剤※※	○	○	50 倍 (0.5ℓ/セルトレイ等※灌注)	定植前日~定植時 / 1 回
	アザミウマ類	ハモグリバエ類	400 倍 (0.4ℓ/㎡株元灌注)	(生育期) 収穫 14 日前まで / 1 回
ベストガード粒剤※※	○	○	6 kg/10a (植溝処理土壌混和)	定植時 / 1 回
	○	○	6 kg/10a (株元処理)	(生育期) 収穫前日まで / 3 回以内
	○	○	50g/セルトレイ等※(使用土壌約 3~4ℓ) 散布	定植当日 / 1 回
ディアナ SC	○ ^{アザミウマ類}	○	2,500~5,000 倍	収穫前日まで / 2 回以内
アグリメック	○	○	500~1,000 倍	収穫 3 日前まで / 3 回以内
プレオフロアブル	○	○	1,000 倍	収穫 3 日前まで / 4 回以内
アフーム乳剤	○	○	1,000 倍	収穫 7 日前まで / 3 回以内
カスケード乳剤	○	○	4,000 倍	収穫 14 日前まで / 3 回以内
アクタラ顆粒水溶剤※※	○	○	1,000~2,000 倍	収穫 3 日前まで / 3 回以内
アドマイヤーフロアブル※※	○ ^{アザミウマ類}	○	2,000~4,000 倍	収穫 14 日前まで / 2 回以内

注) 1. ※印は、セル成型育苗トレイ 1 箱またはペーパーポット 1 冊 (30×60cm・使用土壌約 1.5~4ℓ) を略しました。

2. 薬剤の中には、上記処理以外の登録もあります。各薬剤の成分別総使用回数を超えないように十分に注意してください。

3. ※※印は、ネオニコチノイド系剤です。同一系統の連続使用は避けて、他の系統とローテーション処理してください。

農薬を使用する際は、ラベルに記載の登録内容、使用法、注意事項などを確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040